

友だちのつくり方

新年度に入り、1ヶ月が経ちました。新しい生活、新しい学年に少しずつ慣れてきている頃でしょうか。この時期の悩みの一つに、友だちをつくるのが挙げられます。友だちというのは、うまくいく時はあまり意識をしなくても何となくつくれてしまうものですが、いざ欲しくてもつくれないと思うと、どうやってつくったらいいか悩んでしまうものです。

特にコロナ禍では、人と人とのかわりにも制限があって、余計に難しいと感じている人もいるかもしれません。

今回は、友だちづくりに役立つ落語を紹介し、そこから友だちづくりのコツを一緒に考えたいと思います。

～長短～

気の短い短七と、気の長い長さん。

二人は隣り合って住んでいる。

まったく正反対の二人だが、不思議と仲が良い。

ある日、短七の家の前で顔を出したり引っ込めたりしている者がいた。長さんだった。

短七は長さんを家に招き、お菓子や煙草を振る舞う。

しかし、お菓子を食べていても、煙草を吸っていても、何をやってもものんびりしている長さんに、ヤキモキしてしまう短七。

短七はじれったくなって、「こうするんだ!」とお菓子を飲み込み、煙草を勢いよく吸ってみせる。

そんな短七に、長さんは何やら教えたいことがあるようで、こんなやり取りを始めます。

長さん：「お前さんは、人に物を教わるのは嫌いかい？」

短七：「ああ、大嫌いだ」

長さん：「俺が、教えても、怒るかい？」

短七：「お前さんと俺とは子どもの頃からの友だちだ。悪いところがあったら教えてくれ」

長さん：「本当に怒らないかい？」

短七：「ああ、怒らないから言ってくれ」

そして、長さんは短七にあることを告げるのです……



落語のオチをここで教えてしまうのは野暮なので、ぜひ実際の『長短』を聞いてもらえればと思います。一人の落語家が、性格が真逆の二人を演じ分ける技は一見の価値あります。

友だちとは、気の合う仲間、ウマの合う相手と言い換えることができるでしょう。では、どんな人が自分にとって気の合う、ウマの合う人といえるのでしょうか？

この落語の登場人物、短七と長さんを参考にすれば、似ていたり、共通するところもあるけれど、違うところもある相手がそういう人と言えそうです。昔からの幼馴染で、住んでいるところも近いけれど、性格は全然真逆、でも二人は仲良しなのです。

友だちとは違いますが、仲の良い双子のきょうだいを何組か知っています。彼らは見た目もそっくり、育った環境も同じですが、双子本人たちに聞くと、お互いの違いについてちゃんと答えてくれます。やっぱり全部が同じではないのです。

心理学の世界では、人と人が仲良くなるためには似ているところが必要だけれど、関係を長続きさせるためには違うところが必要だという説もあります。人間関係にとってはどちらも大切な要素だということです。

ただ、周りにいる人たちが、自分と似ているのか、それとも違っているのか、それを知るためにはまずは勇気を出して、声をかけてみることから始まります。何もなく急に声をかけるのは難しいので、授業で近くの席だったから・・・、バイトで一緒になって・・・、サークルが同じで・・・、などまずは何か共通点のある人だとかかわりやすいかもしれません。これもある意味、自分と似ていたり、共通しているところからスタートをすることになるわけです。

そう考えてみると、周りの人と何か共通することを始めてみるのが友だちづくりのコツといえるでしょう。

総合相談室では、悩みの相談も受け付けていますが、さまざまなグループ・ワークも開催しています。友だちや知り合いをつくるきっかけにもなると思いますので、興味のある方は総合相談室からの連絡やホームページを確認してみてください。

専任カウンセラー 後藤 龍太